

## 試行的実践から明らかとなった看護学生に対する OSCE の意義と課題

(看護実践能力 / OSCE (客観的臨床能力試験) / 看護技術評価)

大森真澄\*・矢田昭子\*・三瓶まり\*・足立経一\*・比良静代\*・松浦志保\*・江藤 剛\*  
澄川真珠子\*・森山美香\*・山口美智子\*・木村真司\*・佐藤美紀子\*・増原清子\*\*

## The Significance and Difficulties Revealed by Preliminary Practice in the OSCE for Nursing Students

(Nursing Competence / Objective Structured Clinical Examination / Nursing Skills Evaluation)

Masumi OMORI, Akiko YATA, Mari SANPEI, Kyoichi ADACHI, Shizuyo HIRA  
Tsuyoshi ETOH, Shiho MATSUURA, Masuko SUMIKAWA, Mika MORIYAMA  
Michiko YAMAGUCHI, Shinji KIMURA, Mikiko SATO and Kiyoko MASUHARA

The aim of this study was to clarify the significance and difficulties of the comprehensive nursing practicum I. This practicum will start in 2011 and will include a nursing objective structured clinical examination(OSCE) which will be completed done prior to starting the nursing practicum in the hospital. The study subjects were 6 students who voluntarily participated in the preliminary nursing OSCE in 2010. Self-administered questionnaires were given to the students immediately after taking nursing OCSE and after starting the nursing practicum.

The majority of participants answered that they received relatively good results in the written examination which assessed clinical knowledge; asking for symptoms, interviewing the sham patients, performing physical assessment and nursing care. In addition, all of them answered that OSCE is valuable for carrying out the nursing practicum in the hospital. However, they felt that they could not demonstrate their true abilities due to being under too much tension and the feedback from teachers was not sufficient. Therefore, mental support and effective feedback from the teachers seems to be necessary to improve the nursing performance of students and to improve student's confidence when carrying out the nursing practicum in the hospital.

本研究の目的は、平成23年度に開講する看護学総合実習 I (客観的臨床能力試験: OSCE) に先立ち、試行的に実施した OSCE に関する学生の調査から、臨地実習前に OSCE を行うことの意義と課題を明らかにすることである。A 大学看護学科3年次学生のうち任意で OSCE に参加した6人に、自記式無記名の質問紙調査を OSCE 直後と臨地実習中に実施した。その結果、事前に知識を確認する記述試験および模擬患者に対する問診・面接、フィジカルアセスメント、清潔ケアの実践について、6人中4~5人の学生が「だいたいできた」、6人全員が OSCE は臨地実習に役立つと回答した。課題は、学生の緊張による技能発揮不足と教員のフィードバックに対する不満であった。学生が看護実践能力を高め、臨地実習への自信をもてるようにするには、教員による情緒的支援と効果的なフィードバックの必要性が示唆された。

### I. はじめに

医療は、日々革新的に変化を遂げ高度化している。また、在院日数の短縮や少子高齢化により患者一人ひとりの医療に求めるニーズの多様化がみられる。このような現状の中で、大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会報告書<sup>1)</sup>が提示され、学士課程教

\*島根大学医学部臨床看護学講座

Department of Clinical Nursing, Shimane University Faculty of Medicine

\*\*元島根大学医学部臨床看護学講座

Former member of Department of Clinical Nursing, Shimane University Faculty of Medicine

育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標が策定された。各看護系大学には、主体的な教育理念の基に高度な看護判断と質の高い看護技術、さらに患者の権利や自己決定の尊重などの視点をもった看護実践能力を有する人材の育成が求められている。しかし、看護基礎教育では実習時間や実習場所の縮小化、実習における侵襲を伴う看護行為の制約などがあり、臨地実習の見直しや教育内容・方法の工夫が課題となっている。このような状況の中で社会から求められる看護実践能力を備えた看護師育成を行うための有効な教育方法<sup>2)~4)</sup>として客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination, 以下 OSCE とする）が注目されるようになった。

本研究では、平成23年度開講予定の看護学総合実習 I（OSCE）に先立ち、前年度に試行的 OSCE を実施し、それに対する学生の評価をもとに意義と課題を明らかにし、看護学総合実習 I（OSCE）を効果的に実施するための検討資料とすることを目的とした。

## II. 試行的 OSCE の概要

### 1. 目標と事例

目標は事例の健康問題について、フィジカルアセスメント技術を用いてアセスメントし、アセスメント結果を踏まえて清潔ケア方法を計画し、安全・安楽に実施することができることとした。

事例は、慢性閉塞性肺疾患（COPD）をもつ在宅酸素療法を受けている老年期の患者とし、肺炎を併発し呼吸状態が悪化したため入院し薬物療法と酸素療法を受け、清潔ケアを拒否している場面とした。

### 2. 実際（図1）

- 1) 実施期間：臨地実習が開始される3週間前の2日間とした。
- 2) 課題の提示：OSCEの実施1カ月前に、イラストの入った事例と事前学習の課題の提示、問診・面接、フィジカルアセスメント、清潔ケアのOSCE方法に関するオリエンテーションを行った。
- 3) OSCEの実施：学生は、病態・フィジカルアセスメント・清潔ケアの確認テストに合格した後に、模擬患者に対する問診・面接、フィジカルアセスメント、清潔ケアのOSCEを受けた。OSCE実施後に、模擬患者と教員2名から学生に対してフィードバックを行った。

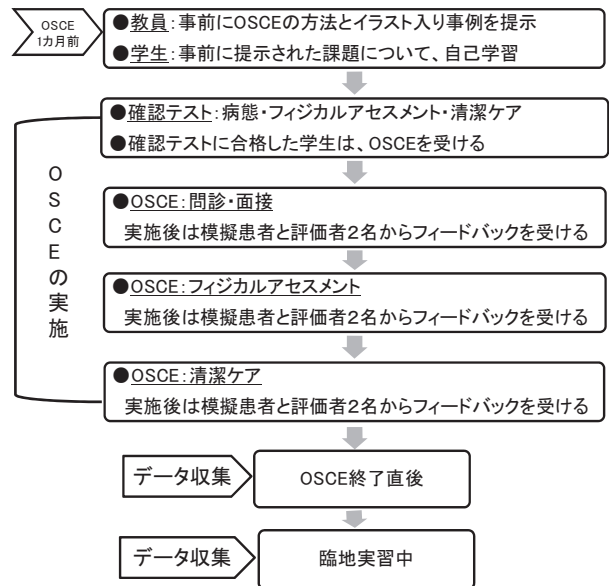


図1 OSCEの実際とデータ収集

## III. 調査方法

### 1. 調査対象

A大学医学部看護学科3年次学生のうち任意で試行的OSCEに参加した6人。

### 2. データ収集方法

データ収集の時期は、OSCE直後と3年次の臨地実習中の2回とし、自記式無記名の質問紙調査を実施した。

- 1) OSCE直後の質問紙調査の内容は、事前オリエンテーション、確認テスト1（病態とフィジカルアセスメント）、確認テスト2（清潔ケア）、問診・面接、フィジカルアセスメント、清潔ケアの実施についての達成度評価で「できた」～「全く出来なかった」の4段階で調査した。さらにそれぞれの質問項目についての回答理由や感想を自由記述で求めた。
- 2) 3年次臨地実習中の質問内容は、OSCEに参加したことが臨地実習に役立っているかどうかについての評価で、①確認テスト1（病態とフィジカルアセスメント）、②確認テスト2（清潔ケア）、③問診・面接、④フィジカルアセスメント、⑤清潔ケアについて「とても役立っている」～「まったく役立っていない」の4段階で調査を行った。また、臨地実習に取り組みながら、OSCEに参加したことをどのように感じているのかを自由記述で求めた。

### 3. データ分析

各項目について単純集計を行った。自由記述については、内容の類似性に基づいてカテゴリー化を行った。

以下、カテゴリは【 】で示す。

4. 倫理的配慮

研究への協力依頼は、OSCE の評価判定の終了後に行った。対象者には、調査の目的および方法、調査への参加は自由意思に基づくこと、質問紙の回答のいかんに関わらず学習上の不利益を被ることはないこと、個人情報保護とデータの管理について、得られたデータは研究目的以外に使用しないことを口頭及び文書で説明した。質問紙は留置き法で回収し、提出をもって研究参加の同意とした。

IV. 結果

1. OSCE 直後の評価 (表1・表2)

OSCE 直後の質問紙調査には6人全員の回答が得られた。確認テスト1 (病態・フィジカルアセスメント) は、5人が「だいたいできた」とし、1人が「あまりできなかった」と答えた。確認テスト2 (清潔ケア) は4人が「だいたいできた」とし、2人が「あまりできなかった」と回答した。問診・面接は5人が「だいたいでき

表1 OSCE直後の評価 (n=6)

項目	できた	だいたいできた	あまりできなかった	まったくできなかった
オリエンテーション内容の理解	0	6	0	0
確認テスト(病態・フィジカルアセスメント)の解答	0	5	1	0
確認テスト(清潔ケア)の解答	0	4	2	0
準備と身だしなみのチェック	1	3	2	0
問診・面接の実施	0	5	1	0
フィジカルアセスメント	0	4	2	0
清潔ケアの準備・実施	0	5	1	0
	とても役立つ	まあまあ役立つ	あまり役立つない	まったく役立つない
臨地実習にOSCEは役立つか	3	3	0	0

表2 OSCEの内容に対し評価したその理由や感想 (OSCE直後)

OSCEの実施内容	カテゴリ	コード(一部抜粋)
事前学習	事前学習の提示の適切さ	・事例がイラストでイメージしやすかった ・事前学習内容が明記されていたのでポイントを押さえた勉強ができた ・評価項目が明記されていたので学習(トレーニング)をしやすかった
	主体的な技術練習の取り組み	・個人で練習する以上に仲間確認しながら練習した ・今までにしたことのないほど練習してよかった
確認テスト	知識の確認	・酸塩基平衡のpHが難しかった ・酸素解離曲線でSpo2とPao2の関連がわからなかった
	実際にケアに役立つ内容	・実際ケアを行うのに必要な知識の確認ができる内容でよかった ・事前に立てていたケア計画を回答できてよかった
	試験内容の妥当性	・病態は関連図みだいでやりやすかった ・回答しづらい内容もあった
準備と身だしなみ	場に応じた身だしなみの気づき	・髪型や靴下などの準備が悪かった ・患者がどう感じるかという視点で身だしなみを考えられなかった
	使用物品の不足	・物品は使えるだろうと軽い気持ちがあった ・緊張して血圧計のチェックを忘れたのが残念だった
問診・面接	患者に応じたコミュニケーション	・事前学習をしていたので、流れにそって話を聞くことができた ・模擬患者は全く知らない人で緊張したけど、初めて会って関係づくりをするという感じがよかった ・模擬患者が自分の対応で動揺されないようなコミュニケーションができてよかった
	真剣さに欠けた模擬患者への対応	・模擬患者の状況が理解できていなくて、聞いてはならない質問をした ・模擬患者なので、本当に理解しようと関わっていないことに気づいた
フィジカルアセスメント	緊張による技能の発揮不十分	・視診のところで、ビール樽様胸部などの細かいところの観察ができなかった ・(緊張して)うまくできなくてくやしかった
清潔ケア	安全・安楽なケアの配慮不足を実感	・酸素管理しながらのケアでは安全面の配慮が難しかった ・呼吸困難がある患者に「(清拭を)やってみよう」と思えるような関わりができなかった ・体位に気を配れば時間短縮できたかもしれない ・手技はよかったが、患者の個別性への対応が抜けていた
		臨地実習に活かせるケアの自信
	いかなる状態の患者にも応用できる自信	・各論では対象が小児など手技を変えることはあるが、どこへいっても気を付けないといけないので勉強になった ・COPDの患者を受け持つことは少ないけれど、他の病気の患者にも十分応用できる
臨地実習に役立つか	個別性を重視したケアの必要性の学び	・ケア中に患者の思いを確認することの必要性を学んだ ・優先順位を確認することの必要性を学んだ
	知識・技術を統合することの必要性	・病態と事前情報から、どうしてその観察をするのかにつながった ・病態から必要なフィジカルアセスメントとケアのつながりをきちんと理解しないといけないと感じた
	課題の気づきと達成	・確認テストや実技テストで自分の足りない点がわかり注意することがたくさんあることを実感できた ・基礎実習では清拭をしなかったし、温タオルで清拭を行ったことがなかったので経眼できてよかった
	フィードバック	・模擬患者からの肯定的なフィードバックをうけて嬉しかった ・模擬患者からのフィードバックで学ぶことができた ・何についてチェックしたのかフィードバックして欲しかった

た」、フィジカルアセスメントは4人が「だいたいできた」と回答した。清潔ケアの実施は、5人が「だいたいできた」と回答した。どの項目も1～2人の学生が「あまりできなかった」と回答した。

OSCEの内容に対して評価したその理由や感想には、事前学習では【事前学習の提示の適切さ】【主体的な技術練習の取り組み】があり、学生は学習内容の明記やイラストによりイメージ化しやすかったこと、グループ学習などが主体的な学習につながったと述べていた。確認テストでは、【知識の確認】【実際にケアに役立つ内容】【試験内容の妥当性】があり、酸塩基平衡や酸素解離曲線の理解が不十分であり、ケアを行う上で知っておく必要があることに気づくことができていた。また、学生は確認テストでの回答しづらい内容についての検討を求めている。準備と身だしなみでは【場に応じた身だしなみの気づき】【使用物品の不足】があり、患者に与える印象を考慮し場に応じた身だしなみの必要性和、使用物品の点検の不十分さについての振り返りがみられた。問診・面接では【患者に応じたコミュニケーション】【真剣さに欠けた模擬患者への対応】があり、模擬患者に対しての気配りと模擬患者であるがゆえに真剣に対応しようとしていなかった自分に対する気づきが見られた。フィジカルアセスメントには【緊張による技能の発揮不十分】があり、細かいところまで観察できなかった事や緊張して十分な手技ができなかったことが述べられていた。清潔ケアでは【安全・安楽なケアの配慮不足を実感】【臨地実習に活かせる

ケアの自信】があり、酸素の管理をしながら安全に配慮したケアを行うことの困難さ、体位の工夫、呼吸困難がある患者に対する個別性のある対応の難しさを実感していた。臨地実習に役立つかの項目には、【いかなる状態の患者にも応用できる自信】【個別性を重視したケアの必要性の学び】【知識・技術を統合することの必要性】【課題の気づきと達成】が抽出された。学生は、COPDの患者を受け持つ機会は多くはないが他の患者にも応用できると感じていた。また、患者の状態に応じた優先順位の確認や病態の理解とフィジカルアセスメントに基づいたケアの選択、自分に不足している知識や技能についての学習課題を見出していた。フィードバックでは、【模擬患者のフィードバックによる効果】【教員のフィードバック内容への不満】があり、模擬患者のフィードバックからの学びがみられた。一方で学生は、教員が何について評価したのか明確なフィードバックを求めている。

## 2. 臨地実習中の評価 (表3・表4)

臨地実習中の質問紙調査には6人中5人の回答が得られた。臨地実習中に、実際にOSCEが役立っているか問うたところ、「役立っている (とても役立っている・まあまあ役立っている)」と答えた者は確認テスト (病態・フィジカルアセスメント) では4人、確認テスト2 (清潔ケア) では5人、問診・面接は4人、フィジカルアセスメントは4人、清潔ケアの実施は5人であった。1人の学生は確認テスト1 (病態・フィジカル

表3 臨地実習中の評価 (n=5)

項目	とても役立っている	まあまあ役立っている	あまり役立っていない	まったく役立っていない
確認テスト(病態・フィジカルアセスメント)	1	3	1	0
確認テスト(清潔ケア)	2	3	0	0
問診・面接の実施	2	2	1	0
フィジカルアセスメント	4	0	1	0
清潔ケア	3	2	0	0

表4 臨地実習中にOSCEの内容がどのように役立ったかについての意見や感想

OSCEの実施内容	カテゴリー	コード(一部抜粋)
確認テスト	フィジカルアセスメントするための学習の必要性を認識	・フィジカルアセスメントは実習で行うことなので勉強になった ・病態を理解していないとフィジカルアセスメントができないとわかった ・疾患と症状、合併症とのつながりが理論的に意識できるようになった
	患者に応じた清潔ケアの選択の必要性を認識	・清拭の意義について確認できてよかった ・なぜこの患者に清拭を選択するの考えなければいけないとわかった
問診・面接	患者に応じた情報収集能力の向上	・患者の状態をアセスメントするために、どのような情報が必要か考えるトレーニングになった
	実習場を想定したトレーニングによる緊張緩和	・模擬患者に行くことはとても緊張したが、実習前の良い練習になった ・精神的に落ち着いて患者と接することができた
フィジカルアセスメント	フィジカルアセスメントへの自信	・実習で患者に対して自信をもってフィジカルアセスメントができるようになった ・基本を確認できたので正しい方法で実施できた
清潔ケア	自信をもった清潔ケアの実施	・実習で自信をもってケアができる ・実際に臨床で行う方法であったので実習でも役立てられる ・清潔ケアは多くの患者に必要なのでとても役立っている
全体	呼吸管理技術の習得	・呼吸管理は役立っている
	臨床場を想定しやすい学習体験	・実際の臨床場を想定できたので、実習前のような勉強になった

セメント), 問診・面接の実施, フィジカルアセスメントの項目で「あまり役に立ってない」と回答した。

役立っている理由として, 確認テストでは【フィジカルアセスメントするための学習の必要性を認識】【患者に応じた清潔ケアの選択の必要性を認識】があり, 病態とフィジカルアセスメントのつながりや, 患者に応じたケアの選択の必要性について述べられていた。問診・面接では【患者に応じた情報収集能力の向上】【実習場面を想定したトレーニングによる緊張緩和】があり, 患者の状態をアセスメントするために必要な情報を収集するトレーニングになったことや臨地実習で精神的に落ち着いて患者に接することができたと述べられていた。フィジカルアセスメントでは【フィジカルアセスメントへの自信】がみられ, 学生は, 臨地実習で自信をもってフィジカルアセスメントできるようになったこと, OSCE で基本を確認し正しい方法で実施できるようになったと述べていた。清潔ケアでは【自信をもって清潔ケアの実施】があり, 臨地実習で自信をもってケアができることや清潔ケアは多くの患者に必要でありとても役立っていることが述べられていた。全体として【呼吸管理技術の習得】【臨床場面を想定しやすい学習体験】がみられた。あまり役立っていない理由として, 実習において実際に技術を活用するには至っていない場合があった。

## V. 考 察

### 1. 3年次臨地実習前に OSCE を実施することの意義

OSCE 直後の評価では, 6人中4~5人の学生がどの項目についても「だいたいできた」とし, 6人全員が臨地実習ではどの項目も「役立つ」と回答した。さらに, 臨地実習中でも5人中4人が「役立っている」と回答した。今回の OSCE は, 生命に直結する呼吸・循環管理が必要な患者の事例を用い, 臨床により近い方法で実施した。学生は, OSCE を受けたことによって安全・安楽なケアの必要性を実感し, 臨地実習にむけた自信と課題をみいだすことができたのではないかと考える。さらに, 学生は模擬患者に対してケアを行うことで, 臨地実習のイメージ化がはかれ, 臨地実習で役立つと回答したのではないかと考える。OSCE を受けた学生は, 事前に提示された課題について自己学習し, 臨床に近い方法で OSCE を受けたことで, 健康レベルに応じた個別性のある看護を提供するための判断と技術の必要性を認識し, 獲得した技術を臨地実習に役立てることができたと考えられる。

### 2. OSCE 実施上の課題

OSCE を受けた学生は, 確認テスト, 問診・面接, フィジカルアセスメント, 清潔ケアの実施について概ね達成可能な課題であったと自己評価し, 自己を振り返りながら課題を見出すことができていた。このことは, 学生が評価者からのフィードバックを受けることで問題解決能力や態度・技能について深めることができたためと考える。しかし, 学生の中には緊張が強く, 技能の発揮の不十分さと教員のフィードバック内容への不満などの意見がみられた。高橋ら<sup>5)</sup>の研究では, 約半数の学生が OSCE で十分に技能が発揮できなかったとし, その要因に「緊張」をあげていた。このことから教員の役割は, 学生が緊張の中でも技能の発揮ができるように関わることと, 十分に技能が発揮できない場合でも学生自身ができなかった理由について振り返り, 自己の看護技術について評価する機会をもつことが重要であると考えられる。

今後, 効果的なフィードバックを実践するには, 評価の視点を教員間で統一できるようにすることや学生が自己の課題を見出し自信につながるようなフィードバックのスキルが教員に求められる。

## VI. 結 論

1. 臨地実習前に OSCE を行うことの意義は, 学生が事前に提示された課題について自己学習し, 臨床に近い方法で OSCE を受けたことで自信が生まれ, 獲得した技術を臨地実習に役立てることができたことである。
2. 課題は, 学生の緊張による技能発揮不足と教員のフィードバックに対する不満であった。今後, 学生が看護実践能力を高め, 臨地実習への自信をもてるようにするには, 教員による情緒的支援と効果的なフィードバックの必要性が示唆された。

## 引用文献

- 1) 文部科学省: 大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会最終報告, 2011.
- 2) 内田倫子, 土屋八千代, 赤星成子他: 成人看護学における OSCE の試み, 南九州看護研究誌, 6 (1), 55-61, 2008.
- 3) 井上千晶, 井山ゆり, 吉川洋子: 「看護基本技術支援プログラム」が学生の学習課題と自己学習及び臨地実習へ与えた影響, 島根県立看護短期大学紀要, 12, 51-58, 2006.
- 4) 山本絵奈: 看護実践能力の評価 一平成19年度卒業

時 OSCE（客観的臨床判断能力試験）を実施して一、  
京都中央看護保健専門学校紀要, 15, 47-54, 2008.  
5) 高橋由紀, 浅川和美, 沼口知恵子他: 全領域の教

員参加による OSCE 実施の評価 —看護学大学生の認  
識から見た OSCE の意義—, 茨城県立医療大学紀要,  
14, 1-5, 2010.

(受付 2011年8月10日)